

2022 年度 授業についての満足度調査

1. 調査目的 ①学科の取組について評価する
②授業で身につけるべき能力(学修成果)について評価する
③学生自身の授業への取組みについて評価する
④学修成果がどの程度身についたか評価する

以上の①～④から、学生の授業への満足度を調査することにより、個々の項目を精査し翌年度の授業改善の一助とする。

2. 実施期間 2022 年 1 月中旬～2023 年 3 月上旬

3. 調査回答者数 保育学科回収率 1 年生 83.5% (81 人)
2 年生 82.8% (82 人)
ライフデザイン総合学科回収率
1 年生 90.8% (59 人)
2 年生 90.3% (56 人)

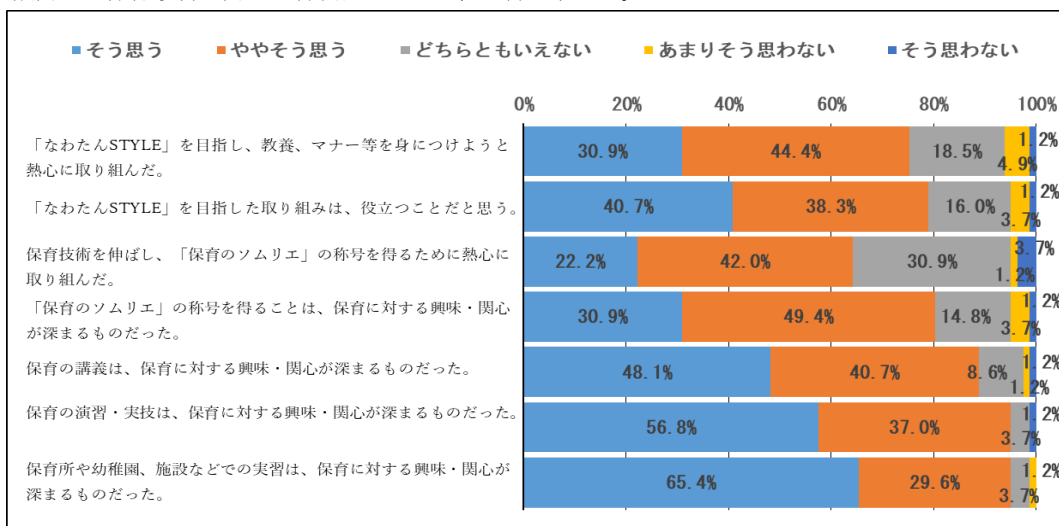
4. 調査方法 無記名のアンケート用紙で実施し、回収、集計等は教学委員が担当。

5. 結果のデータ処理 両学科それぞれの教育内容を意識した質問項目を設定している。
ライフデザイン総合学科設問項目 I 以外では、
“そう思う～そう思わない” の 5 段階評価としてグラフ化した。

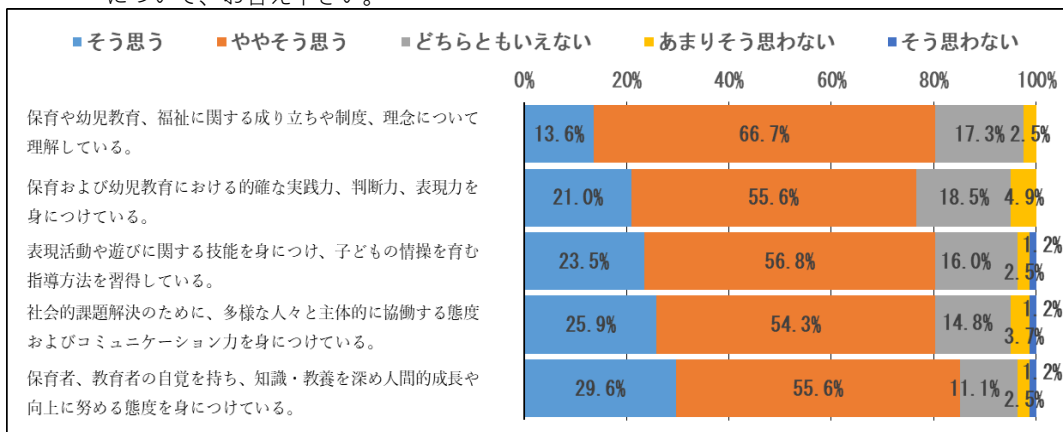
保育学科 1年生

回答率 83.5%

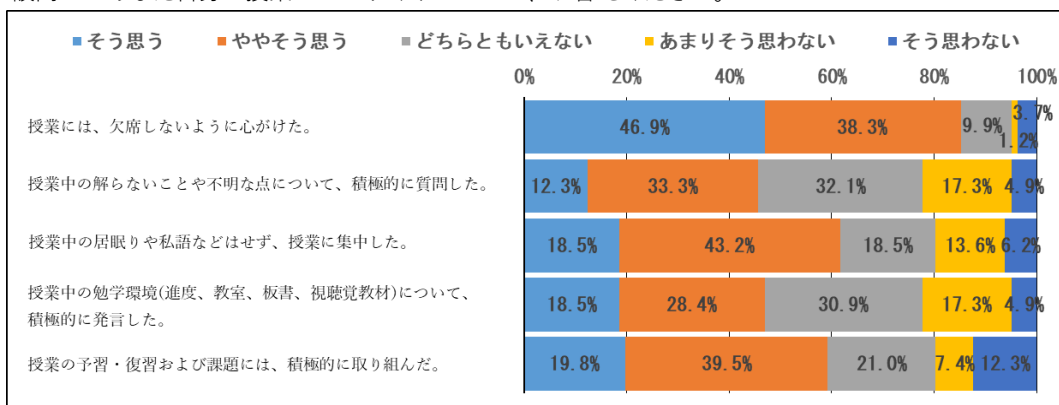
設問Ⅰ 保育学科に関する各項目について、お答え下さい。



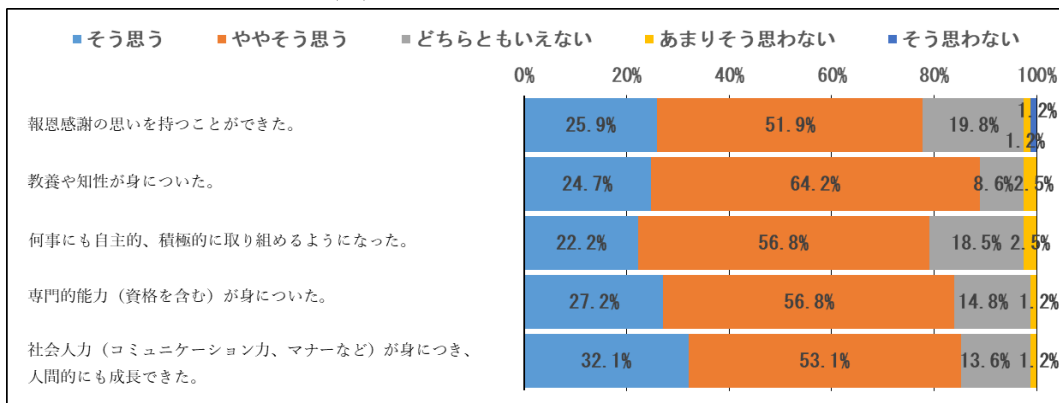
設問Ⅱ 保育学科の教育目標に基づき、学生が各授業科目で身に付けるべき能力（学修成果）について、お答え下さい。



設問Ⅲ あなた自身の授業へのとりくみについて、お答えください。



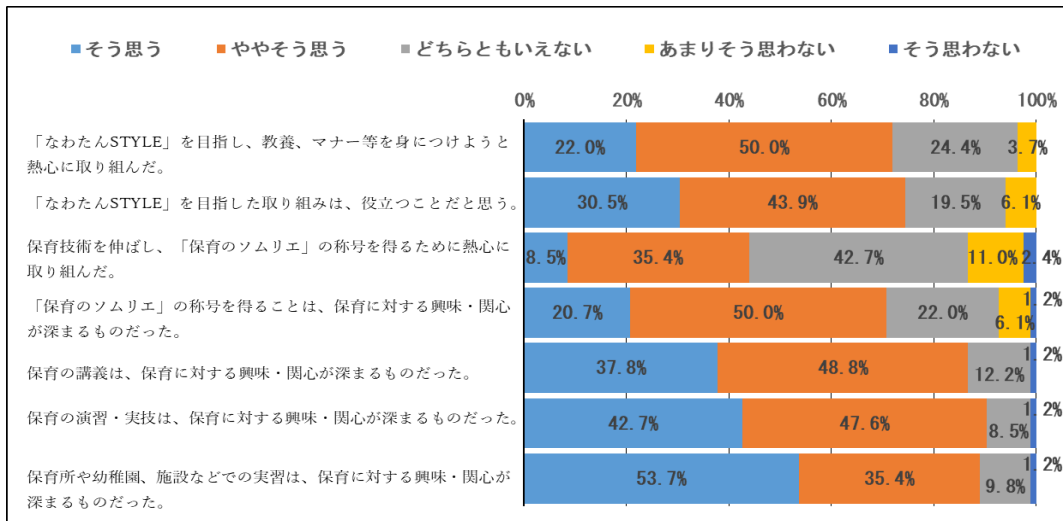
設問Ⅳ あなたの本学での2（1）年間における学修成果について、お答えください。



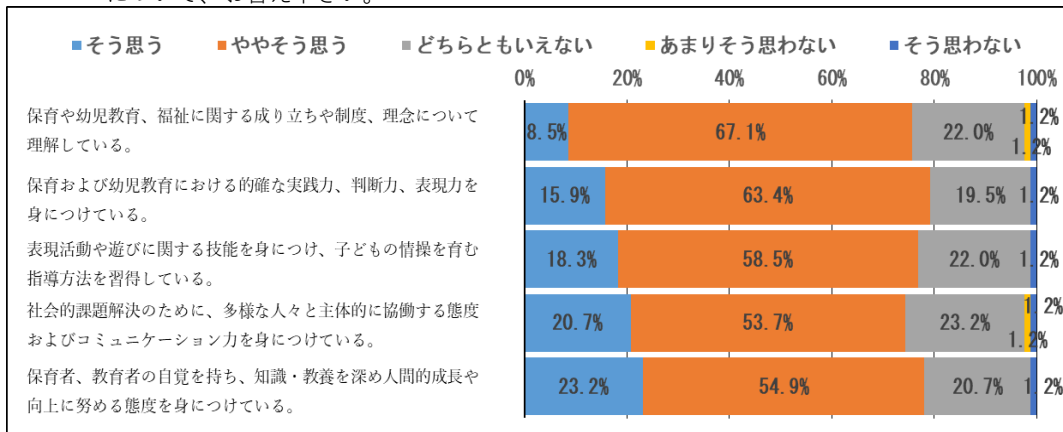
保育学科 2年生

回答率 82.8%

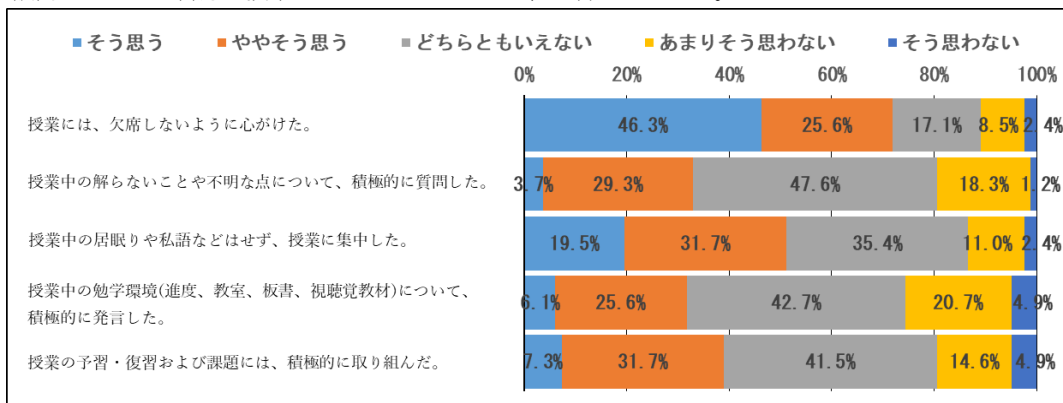
設問Ⅰ 保育学科に関する各項目について、お答え下さい。



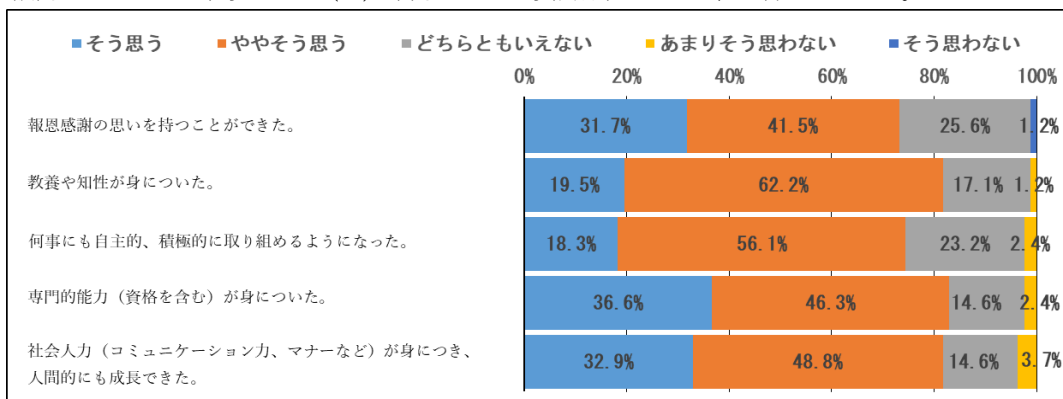
設問Ⅱ 保育学科の教育目標に基づき、学生が各授業科目で身に付けるべき能力（学修成果）について、お答え下さい。



設問Ⅲ あなた自身の授業へのとりくみについて、お答えください。



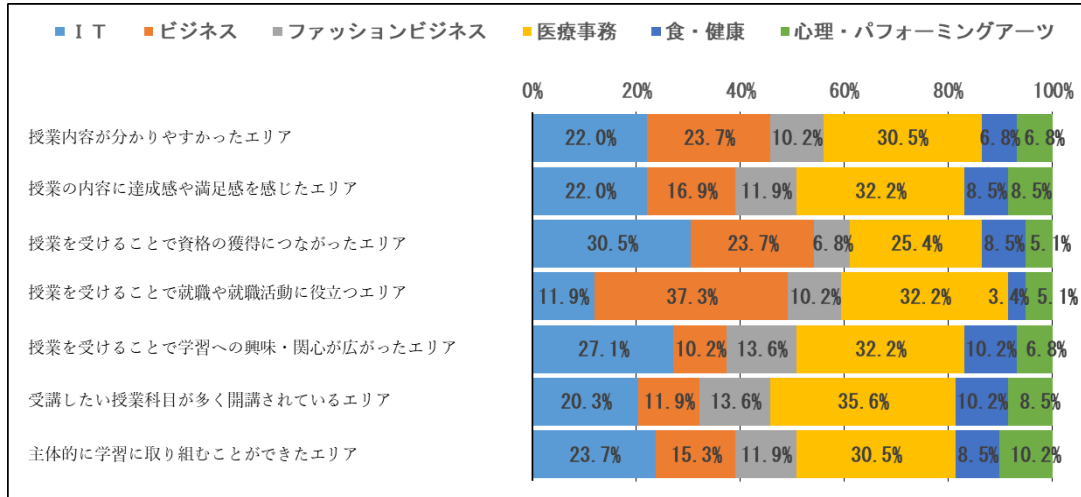
設問Ⅳ あなたの本学での2（1）年間における学修成果について、お答えください。



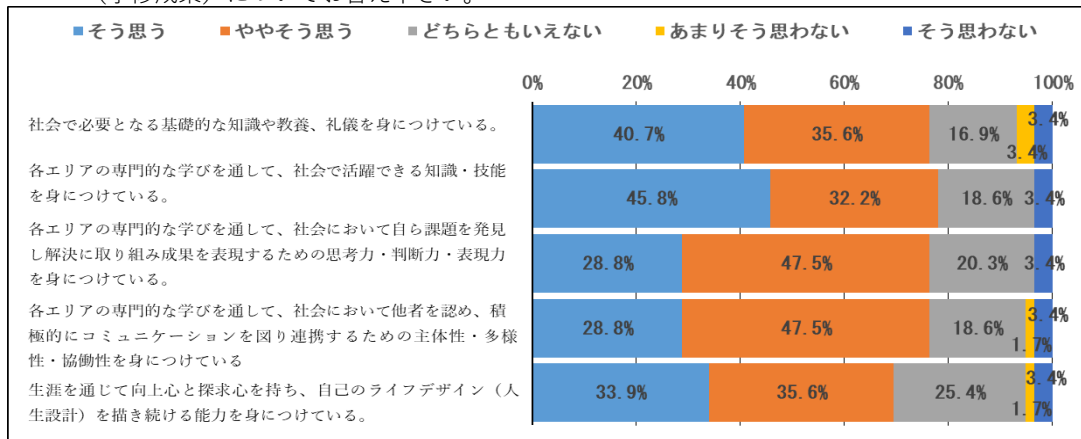
ライフデザイン総合学科学科 1 年生

回答率 90.8%

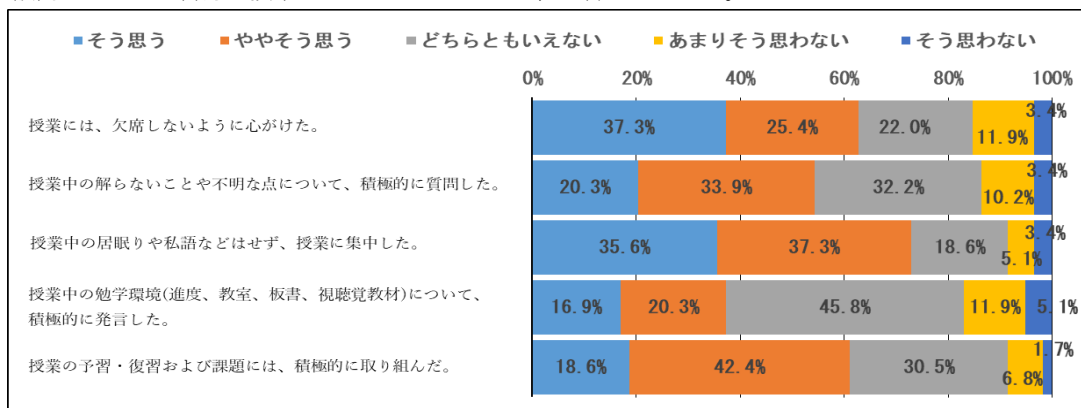
設問Ⅰ ライフデザイン総合学科のエリアについて、お答え下さい。



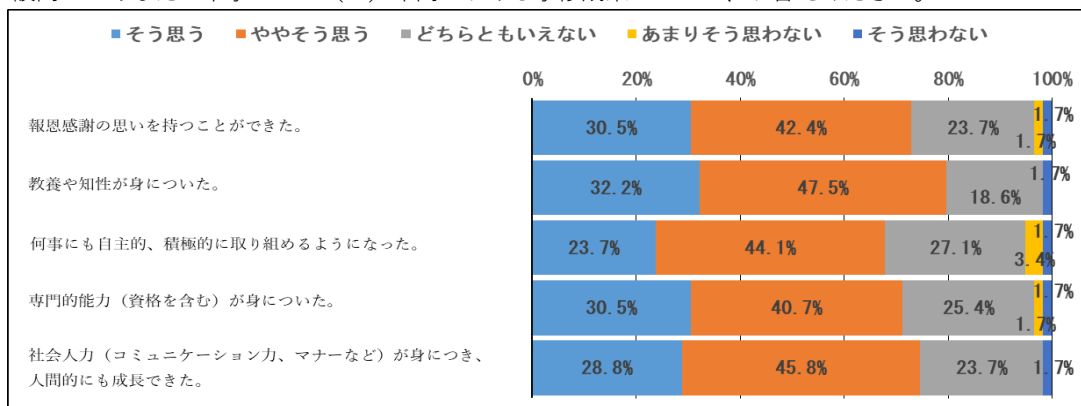
設問Ⅱ ライフデザイン総合学科の教育目標に基づき、学生が各授業科目で身に着けるべき能力（学修成果）についてお答え下さい。



設問Ⅲ あなた自身の授業へのとりくみについて、お答えください。



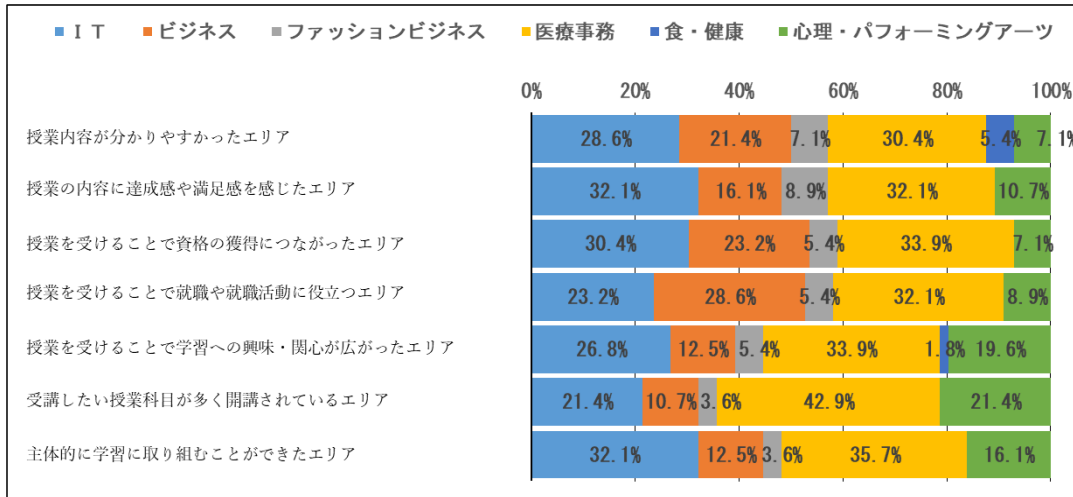
設問Ⅳ あなたの本学での2（1）年間における学修成果について、お答えください。



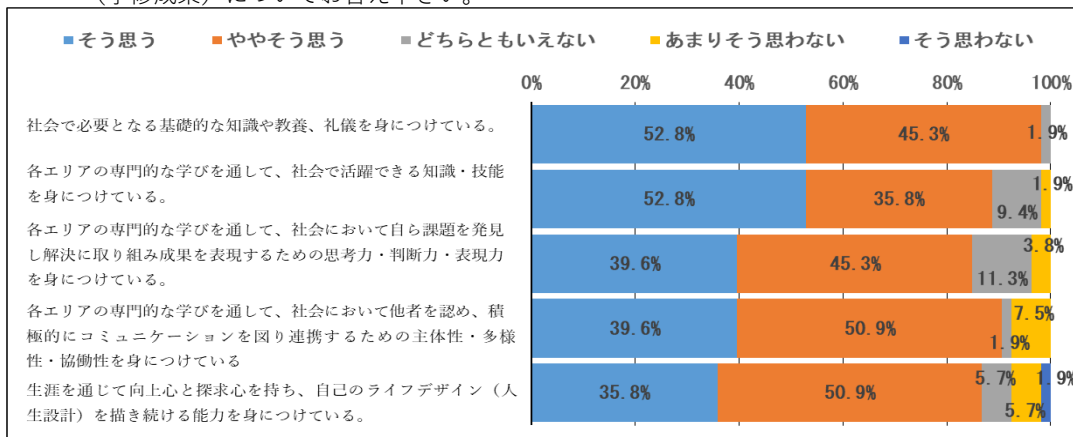
ライフデザイン総合学科学科 2 年生

回答率 90.3%

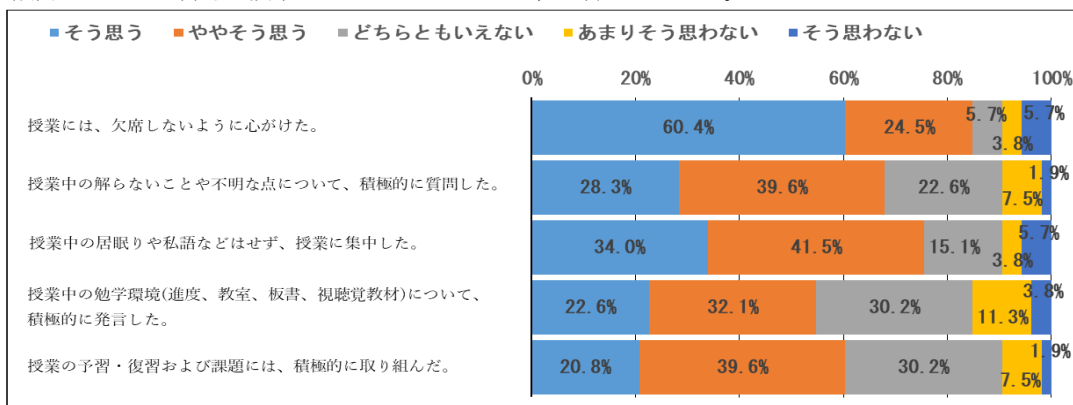
設問Ⅰ ライフデザイン総合学科のエリアについて、お答え下さい。



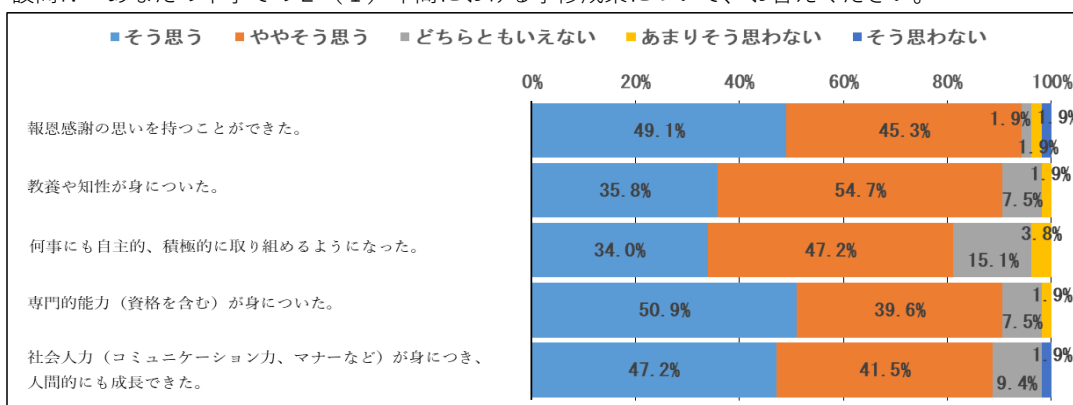
設問Ⅱ ライフデザイン総合学科の教育目標に基づき、学生が各授業科目で身に着けるべき能力（学修成果）についてお答え下さい。



設問Ⅲ あなた自身の授業へのとりくみについて、お答えください。



設問Ⅳ あなたの本学での2（1）年間における学修成果について、お答えください。



2022 年度 授業についての満足度調査

保育学科調査結果コメント （学科長：合田誠）

設問項目Ⅰ 保育学科に関する項目について

保育学科のオリジナル目標である「なわたん STYLE」については、今年度より男子にも門戸を開いた関係で名称を「なわてジェンヌ」から変更した。「教養」や「マナー」等を「身に付けよう」と取り組んだかどうかの設問に「そう思う」及び「ややそう思う」と回答したのが1年生で75.3%、2年生で72.0%となり、両学年ともに、7割を超えた。「なわたん STYLE」の取り組みが「役立つ」かどうかの問いが、1年生で79.0%、2年生が74.4%と「そう思う」及び「ややそう思う」に上っていることから明らかなように、学生がほぼその内容を理解し、重要性を認識しているといえる。さらにその必要性を認識させたのが、「なわたん STYLE」ノートである。1年生にその必要性を浸透させるために保育実習（保育所）及び教育実習授業の冒頭に1週間の振り返りをしてもらい、次週の目標を各自が設定する取り組みを通年にわたり行い、各学期末に担任より一人ひとりに対してコメントを記入してもらったことも大きいと考えられる。

次に「保育のソムリエ」に関してである。「保育のソムリエ」の称号を得るために取り組んだかどうかの問いに対して、1年生は64.2%、2年生の43.9%が「そう思う」、「ややそう思う」と回答している。1年生は昨年度とほぼ同様の数値であったが、2年生が昨年度の2年生と比較して相当数減少した。関連する問いかけとして「保育のソムリエ」への取り組みが保育に対する興味や関心を深める後押しになったかとの問いについては1年生で80.3%、2年生が70.7%となっており、ソムリエの称号を得るための取り組みではなく保育者として必要となる「絵本ソムリエ」、「工作ソムリエ」、「手遊びソムリエ」、「伝承ソムリエ」の4つの技術（引き出し）を身に付けたいという動機による姿勢が見て取れる。一方で「保育のソムリエ」を活性化させるために昨年度に各ソムリエの努力成果を見える化するために「保育のソムリエ」カードを作成し、到達段階に応じたカードを手渡し、さらなるモチベーションアップを図るために準備していたが、コロナ禍により継続的な運営ができず、2年続けて手渡す段階までには至らなかった。

「なわたん STYLE」、「保育のソムリエ」は本学独自の取り組みであるので、引き続き、次年度以降も今年度の反省を踏まえて取り組んでいきたい。次年度はコロナ感染者数もようやく減少傾向となり、「2類相当」から「5類」へ引き下げられる予定でもあり、是非、「保育のソムリエ」カードの活用を実現させたい。

学習形態に関しての設問は、「実習」に関しては1・2年生共に高い数値を示し、1年生は95.0%、2年生は89.1%の学生が「役立つ」かどうかの問いに「そう思う」及び「ややそう思う」と回答している。今年度も「実習」が学内学習よりも高い数値を示しているのは、保育・教育現場での実践学習の場が学生にとって強い影響力を与えている証左となっている。一方で学内学習の中で「座学」が「役立つ」かどうかの問いかけに「そう思う」、「ややそう思う」と回答した学生は1年生が88.8%、2年生は86.6%となり、資格取得と将来保育現場に就きたいという強い思いがあるためか、非常に高い数値となっている。さらには、それ以上に「演習」、「実技」科目については1年生が93.8%、2年生が

90.3%となっている。実習に連動させるためにも「講義」、「演習」、「実技」科目に関して着実に数値が伸びてきたのは各教科担当教員のよりよい授業を提供するために授業改善の意識を高め、安住するのではなく常に高みを目指している成果といえよう。

設問項目Ⅱ 保育学科の教育目標に基づき、学生が各授業科目で身に付けるべき能力（学修成果）について

5項目については、1・2年生の結果として大きな差は認められなかった。何れの項目も「そう思う」、「ややそう思う」の合計は1・2年生とも8割以上の数値となっている。5項目のうち指摘するならば、昨年度と同様に「保育、教育、福祉」に関する成り立ち、制度、理念に関する項目が他項目と比較して若干数値が低くなっている。理念については抽象的な概念整理を授業で展開しているが、学生にはこの抽象から具体的概念整理になかなか結びつかず、苦慮していることが伺える。各授業担当者はこの状況を踏まえうえて、学生の深い学びに繋がる授業改善はその歩を止めてはならない。逆に本学が力を入れている「表現」に関する技能をはじめとする「実践力」などに関しては1・2年生とも8割に迫る数値となっているのは、目に見えるかたちで保育力が身に付いていくのを実感しているからであろう。

また、5項目の教育目標はどれも必要不可欠ではあるが、とりわけ、保育者としての「素養」に関する項目である「保育者・教育者の自覚をもち、知識、教養を深め人間的な成長を高めていく」項目については年度末であるこの時期に保育現場に向かう2年生が「そう思う」、「ややそう思う」の合計78.1%で満足するのではなく、次年度以降教員はさらにその数値を高める努力を学生指導全般から見直して向上させていくように取り組んでいかねばならない。

設問項目Ⅲ 授業への取り組みについて

授業への取り組みの結果は1・2年生の各項目によって共通する項目と差異が認められる項目が昨年に引き続いてあった。まず1・2年生が一致して高い数値を示したのは「欠席しないように心がけた」である。さらに、2年生は「そう思う」、「ややそう思う」を合計すれば71.9%であるのに対して1年生は85.2%と10ポイント以上高い。1年生は初めての大学の授業で、4月当初の新入生ガイダンス時より出席することの重要性を繰り返し説明してきたためと考えられる。今年度は対面授業を完全実施できたためもあり、「出欠」についての意識は強く働いたといえる。2年生も欠席が重なれば「失格」に繋がる意識が十分に認知されていたのではないかとと思われる。

次に共通して満足度が低かった項目は「勉強環境」である。2年生は「そう思う」、「ややそう思う」は31.7%、1年生は46.9%と半数に満たなかった。この理由として考えられるのが、授業アンケートの中間アンケートの自由記述に書かれているのが、「授業の進行速度」についての要望があげられる。つまり、教員は予定している授業範囲までを何とかクリアするためには、意識的に展開を早めることもあれば、学生側からいえるのは授業進行の早さが適切な場合とそうでない場合の理解力の差が影響しているといえる。進行速度について意見を述べたいが、それが素直に出ていない、また出せていない数値の表れであろう。「居眠りせず授業に集中した」との設問には2年生は「そう思う」と「や

やと思う」は 51.2%であったのに対し、1 年生は 61.7%と 10 ポイント以上高い。これは、2 年間の
中で授業に対する姿勢が徐々に低下してきたといえる。確かに 2 年生は、1 年生と比較してコロナ感
染による行動制限で縛られてきた経緯があり、これがモチベーションの低下に連動してきたのでは
ないだろうか。

さらに 1・2 年生で明らかな違いがあった項目は「予習・復習への取り組み」についてである。2 年
生は「そう思う」、「ややそう思う」と回答したのが、39.0%であったのに対し、1 年生は 59.3%と約
20 ポイントの差があった。この理由はこのデータだけでは判断できないが、1 年生は 1 年間継続的に
予習・復習に取り組めた環境や意欲があった反面、2 年生は、前述した授業への集中力の低下と同様
に学習に取り組む意欲低下が認められるのではないか。

設問項目Ⅳ 学修成果について

2 年続いて 1・2 年生とも学習成果に関してすべての項目に高い率を示している。5 項目全てが「そ
う思う」、「ややそう思う」を合わせて 8 割前後となっている。特に「専門的能力が身に付いた」の問
いかけに関しては、2 年生が 36.6%「そう思う」と答えたのに対して 1 年生は 27.2%と 10 ポイント近
く高くなっている。専門的知識と技術の習得については実感として意識しているのであろう。

さらに 2 年生は「報恩感謝の思いをもつ」については 31.7%が「そう思う」と応えている。1 年生
は「そう思う」と応えたのが 25.9%であった。建学の精神である「報恩感謝」が 2 年間の学修過程の
なかで意識化されたことは学生生活を送る日々の地道な取り組みがこの成果に結実したといえる。

「専門的能力」、「報恩感謝」に続いて高い数値をであったのが「人間的に成長できた」である。「そ
う思う」が 32.9%であった。1 年生についてはこの「人間的に成長できた」項目が 32.1%と 5 項目の
中で最も「そう思う」と応えている。これはおそらく 1 年次 3 回に及ぶ実習を乗り越えて身に付けた
と確信している裏返しといえるかも知れない。

2 年生に関してはそのうちの 1 年間はコロナ感染との不安の中で過ごしたためか、モチベーショ
ンの低下が見られたものの学習できたその成果は期待以上であったと数値が示した項目もあり、修
得した学修成果を 4 月より保育現場や社会人としてこの成果を惜しみなく発揮してほしい。

1 年生に関しては 4 つの設問のうち、「授業への取り組み」については満足度がそれほど高くはな
かったが、それ以外の 3 設問については、全ての項目がほぼ 8 割前後となっており、この満足度を次
年度は低下させることなく、維持・向上に各教員は取り組んでいかねばならない。

2022 年度 授業についての満足度調査

ライフデザイン総合学科調査結果コメント （学科長：工藤真由美）

設問項目Ⅰ ライフデザイン総合学科のエリアについて

ライフデザイン総合学科には 6 つのエリア（専門科目群）が存在し、学生は自由にどのエリアからも授業科目を選択し受講できる。それぞれのエリアには、授業を通して取得できる資格や称号があり、中には支援講座となっている科目もある。学生は将来の進路の選択とも照合し、資格や称号取得などを、バランスよく考え、期初の教務ガイダンスを受け、受講科目を選択して履修登録を行う。また、将来の進路や取得希望の資格・称号が未定の学生も現在の興味に従い、シラバスを熟読しながら受講を決定していく。ゆえに学生によって、1 つのエリアの科目を集中的に履修する場合や、柱となるエリアを決め、関連すると思われるエリアから周辺の科目を履修する場合、さらには、6 エリアをバランスよく履修し自己の興味や適性などを見極めようとする場合など、様々なエリア配分で履修している。

7 つの質問項目のうち、「授業内容がわかりやすいエリア」、「授業の内容に達成感満足を感じたエリア」、「授業を受けることで資格の獲得に繋がったエリア」、「授業を受けることで学習への興味・関心が広がったエリア」、「受講したい授業科目が多く開講されているエリア」、「主体的に学習に取り組むことができたエリア」、これらの 6 つの質問に対する回答の上位 2 つを占めるエリアは、例年 1、2 年生ともに同じエリアで、「IT エリア」と「医療事務エリア」である。そして唯一「授業を受けることで就職や就職活動に役立つエリア」は、例年 1、2 年生ともに「IT エリア」に代わり、「ビジネスエリア」が 2 位になっている。今年も同様の傾向である。しかしながら、今年は 3 位において変化がみられた。2 年生では、「授業を受けることで学習への興味・関心が広がったエリア」、「主体的に学習に取り組むことができたエリア」の項目で各 19.6%、16.1%と「心理・パフォーミングアーツエリア」が、12.5%ずつの「ビジネスエリア」を抑えて第 3 位に位置している。また「受講したい授業科目が多く開講されているエリア」の項目において、21.4%で「心理・パフォーミングアーツエリア」が、「ビジネスエリア」と同率 2 位という今までにない現象が生じている。

また、例年受講者が少ない「ファッションビジネスエリア」は、毎年どの項目でもポイントが低い傾向にある。今年度 2 年生も同様の結果で、3.6%～8.9%にとどまっていた。ところが今年度の 1 年生では従来と異なる結果がみられ、各項目 6.8%～13.6%であった。

さらに特筆すべきは、「授業を受けることで就職や就職活動に役立つエリア」、「興味関心が広がったエリア」、「受講したい授業開講が多いエリア」の項目では、上位 3 位に入っており、これは今までになかった現象である。今年度新しい科目を開講したことが要因（2 年生は旧カリキュラムで受講できず）として考えられる。

また、例年選択の少ない「ファッションビジネスエリア」よりも、1 年生では「食・健康エリア」がどの項目でも少ない傾向である。さらに 2 年生に至っては、「内容がわかりやすいエリア」、「興味関心が広がったエリア」を除くすべての項目で、選択者 0 という結果となったことは今までにない現象であり、「ファッションビジネスエリア」と完全に逆転現象がみられた。今後、これらが一過性の

傾向かどうかの見極めが必要と思われる。

設問項目Ⅱ ライフデザイン総合学科の教育目標に基づき、学生が各授業科目で身に着けるべき能力（学修成果）について

1年生は「基礎的知識や教養礼儀を身につけている」、「社会で活躍できる知識技能を身につけている」、「思考力判断力表現力を身につけている」、「主体性多様性協働性を身につけている」、「ライフデザインを描き続ける能力を身につけている」というすべての学修成果について、いずれにおいてもそう思う、ややそう思う、の合計が、76%から78%、であり、唯一「ライフデザインを描き続ける能力を身につけている」は69%であった。例年、1年生は80%から97%程度でいずれの質問項目も推移する傾向にあるが、今年度は極めて低調である。特に「ライフデザインを描き続ける能力を身につけている」に関しては、どちらともいえない、と回答したものが25%であり、彼らが2年目の学びを終えて、学修成果として自己のライフデザインを描き続ける能力を身につけたと回答することを期待したい。また、すべての質問項目で、そう思わない、と回答したものが3.4%いるので、2年間の学びの中で選択者がいなくなることを期待したい。一方、「基礎的知識や教養礼儀を身につけている」の項目はそう思うが、40.7%、「社会で活躍できる知識技能を身につけている」の項目は、そう思うが、45.8%で、半数近い学生が自信をもって評価していることがうかがえる。特に入学直後から礼儀マナー教育に力を注いでいることや、専門エリアの学びから社会で活躍できる知識、技能の獲得が高く評価されたこの数字は喜ばしいと思う。

2年生になるとすべての項目で、そう思う、ややそう思うの合計が85%から98%と高い数値になっている。特に「基礎的知識や教養礼儀を身につけている」では、あまりそう思わない、思わないと回答したものは皆無であった。また、「基礎的知識や教養礼儀を身につけている」と「社会で活躍できる知識技能を身につけている」で52.8%がそう思うと自信をもって回答していることは大変喜ばしい。

設問項目Ⅲ 授業への取り組みについて

1、2年生とも同じような回答の傾向ではあった。しかしながら1年生では、「授業に欠席しないように心がけた」はそう思う、ややそう思うを合わせても63%にとどまっている。例年この質問項目は1、2年ともに80%超えの項目であり、その中であって63%は極めて異例である。実際に出席率は思わしくない学年であった。「積極的に質問した」54%、「授業中私語せず集中した」73%、「勉強環境に積極的に発言した」37%、「予習復習課題には積極的に取り組んだ」61%、いずれもそう思う、ややそう思う、の合計の数字である。2年生の最後にはすべての項目で80%以上になることを願う。

また2年生では「欠席しないように心がけた」、の項目では、例年通り85%の学生がそう思う、ややそう思うと回答、非常に高い割合で、そう思う、ややそう思うが選択された。授業への出席が基本であるということがしっかりと意識されていることがわかる。2年生では「授業中の居眠りや私語をせず集中する」は、そう思うが34%、ややそう思う41.5%と高い値を示している。しかし、「授業の予習復習課題に積極的に取り組んだ」は、60%にとどまっていることがわかる。今後、学年を問わず、

積極的な予習復習を促す仕組みと、シラバスに記載した予習復習の実行チェックを機能させることが必要である。

設問項目Ⅳ 学修成果について

そう思う、ややそう思うという積極的回答についてみると、「報恩感謝の思いを持てた」の項目は、1年生が73%、2年生が94%、「教養や知性が身についた」の項目では、1年生が80%、2年生が90%であった。また、「自主的積極的に取り組めるようになった」が、1年生で68%、2年生で81%となっている。一方で1、2年生ともに15%から20%の学生に消極的な回答がみられる。「専門的知識（資格含む）が身についた」の項目では、1年生が71%、2年生が90%となっている。卒業を控えて資格取得を達成できた様子がうかがえ、学科として掲げている資格取得の成果が数字として表れている。「社会人力が身につく人間的に成長できた」については、1年生が74%、2年生が89%であった。1年生では、いずれの項目でも、そう思わないと回答したものが、1.7%存在した。2年生で「教養や知性が身についた」「自主的積極的に取り組めるようになった」、「専門的知識（資格含む）が身についた」の項目で、そう思わないと回答したものが0であった。特に卒業する段階で本学の建学の精神である報恩感謝が身についていないと回答した学生が1.9%であった。今後も各質問項目の満足度を向上させるように改善に努めていく。